作新の星 特別インタビュー

54年ぶり 甲子園優勝 小針 崇宏監督

▶作新学院高校　▶筑波大学

小針崇宏監督は、2000年春、作新学院硬式野球部の主力選手として甲子園に出場。その一方、希望した筑波大学に進学し、最新の指導理論等を学び“文武両道”を実現した。

2006年、“夢を叶えてくれた母校”に恩返しがしたいと、作新学院に教諭として入職。甲子園6夏連続出場を決め、監督として10年目を迎えた今年。

「全国優勝」という夢は、現実となった！　【聞き手　船田　恵（畑　恵）理事長】

優勝を引き寄せた力 克己心と郷土への思い

理事長　今年の夏はリオから甲子園へと作新の風が吹き起こり、特別な夏になりました。改めて、優勝おめでとうございます。

小　針　ありがとうございます。

理事長　率直なお気持ちとして、優勝の実感はいかがですか。

小　針　正直、これだけたくさんの学校関係者や地域の方々、栃木県民の皆さんに、こんなにも喜んでいただけるとは思っていませんでした。優勝できて本当に良かったと感じています。

理事長　甲子園は神が舞い降りる「聖地」だと、6夏連続して現地で応援させてもらうと実感しますが、今回全国優勝が叶った一番の要因は何でしょう。

小　針　どれだけ本番で、選手たちを楽しませてやれるかが最大の目標です。特に甲子園はそういう雰囲気にさせてくれます。県大会を勝ち抜く方が、互いに苦しさがあると思いますが、甲子園に行くとそこでどれだけ楽

しむことができるかという、そこに焦点を当てています。とにかく楽しめたら勝ち、楽しめなかったら負けということで、「死ぬ気で楽しもうぜ」と選手たちに毎試合話していました。あれだけの緊張感と暑さの中で、勝ちたいという気持ちと自分のプレーとのギャップを考えると、楽しめなくなってきますから。

理事長　甲子園の試合はまさしく山登りで、勝ち進むごとに上りの傾斜がどんどん険しくなっていきますよね。より強豪との対戦となると、普通は試合の雰囲気や展開の仕方が変わるものですが、今回は最後まで変わりませんでしたね。決勝戦が終わっても、まだ試合があるような気がしました。

小針　そうですね。本当に自分も同じ感覚でした。優勝しても「まだ明日試合があるんじゃないか?」という感じで、帰りの新幹線の中でも「帰ったら明日また試合があるんじゃないか?」とみんなで話していたくらいです。

理事長　それだけ試合をすることを、皆が心の底から楽しめていたということですね。

小針　ただ決勝戦だけは特別に感じました。本当に夢の中で試合をしているような感覚が自分自身にありました。「日本一を決める決勝戦なんだ」という観客の方の思いが伝わってきたのだと思います。

理事長　逆にそう感じながらもいつもと同じように、また明日試合があるような感覚でプレーができたというのはすごいですね。

小針　それがこのチームの特徴でした。完全に「相手が敵」ではなくて「自分たちが敵」という感覚でした。本当に山本キャプテンのカラーが、チーム全体に浸透していたのがありがたかったです。

理事長　やっぱりチームのカラーというのがあるんですか。

小針　そうですね。キャプテンのカラー＝チームのカラーに毎年なると思います。

理事長　今回のチームは、ちょっとそっけない位にいつも平常心のままで、最初から最後まで浮足だったところがありませんでしたね。初戦前日に宿舎を激励した際も、集中力の高さを感じました。

小針　いい試合をやると満足感や達成感があるものですが自分が活躍しても、チームが勝ってもそういうのはまったくなかったです。その試合に満足すると、次の試合は負けることになる。勝っていくごとに緩んでいくのではなく、引き締まっていくチームが最後まで残るということを選手たちに毎年言ってきましたが、今年はそれをずっと貫いてくれました。それが大きかったと思います。また、選手たちは自分たちのことを強いとかうまいとか思ってないと思います。

理事長　優勝インタビューでも、山本、今井両選手とも「自分たちは実力もないのに」と何度も言っていました。

小針　自分たちの力だけで勝てたのではないことを実感していたのだと思います。「作新の優勝です」と、本当にいい言葉でした。それぐらい周りの方にお世話になり、応援していただきましたから。野球部員のサポートのメンバーとか応援団、チア、吹奏楽、学校の皆さんの熱い応援、そして地域の方々の支えがあっての甲子園大会出場、優勝だと思います。

理事長　作新というと全員が「地元っ子」ということを評価して

船田　恵（畑　恵）　理事長

くださる方が、最近全国的に増えてきたと感じています。

小針　優勝をこれだけ喜んでいただいている方の中には、選手のご家族はもちろん、小学校から教えてくださった監督やコーチ、中学校の先生や仲間たちなど、一人の選手に対して関わった人は何十人もいるわけです。地元が沸くというのは、そういった方々の心が向けてくれているのだと思います。そう思うととてもうれしい優勝でしたし、選手たちのプレーも、地元に勇気と感動を与えられたのではないかと思います。

「文武両道」を実現 夢を叶えられた母校

理事長　監督自身がまさに地元っ子であり、作新の卒業生です。自分が育った母校で指導したいという気持ちは、いつ頃から芽生えたのでしょう。

小針　2000年のときに21年ぶりの選抜甲子園も経験させてもらえましたし、勉強も野球も文武両道という形でやらせてもらえました。だから、将来は母校で指導者として恩返しができたらいいなという気持ちは強かったです。

理事長　作新で受けた教育の何が、監督の気持ちをそこまで動かしたのでしょう。

小針　野球漬けの毎日でしたが、自分の希望する（筑波）大学に行かせてもらえ、夢が目標になり、目標が達成できました。本当に可能性を叶えられる高校だと思いました。生徒たちにもそういうことを授業中、話しています。「作新は可能性を叶えられる学校だ」と。

理事長　文武両道という意味でも、在学中から小針監督はきわめて優秀だったと思います。ただ「野球漬けだった」という高校生活の中、どのように勉強していたのですか。

小針　勉強は先生方の指導のお蔭で、ほとんど授業中です。もちろんテスト前はちょっと時間を取っていた覚えはあります。

理事長　やっぱり授業中に集中していれば、授業だけで十分成績は伸ばせるということですね。

小針　要点というか大事なところだけは聞き逃さないようにしていたと思います。ノートに板書を写すわけですが、書いてあるのをそのまま写すのではなく、自分なりに付け足したり、逆に書かなかったり。ある先生から「世界に一つだけのノートを自分でつくりなさい」と言われたのがきっかけでした。「後で見直したときに自分なりのノートがあった方がおもしろいでしょ」と言われて、「ああ、そうか！」と。

2000年春選抜に出場し活躍した小針監督

理事長　「要を得る」ことが肝心なのは学習も野球も変わりませんね。

小針　ただやっぱり「点数を取りたい」という欲もあったと思います。負けず嫌いな部分もありましたから。テスト前はしっかりやっていた気がします。

理事長　当時は全体練習が長かったと思います。寝る時間を削ったわけですか？

小針　そのときによってです。夜通しやったというわけではありません。時間を決めてここまで、終わらなかったら明日の朝にという感じでした。何でも負けちゃいけないですから。

理事長　そうですね。何でも負けちゃいけないですね。でも、休日もなく、テスト前は自主練習ということもない時代ですよね。

小針　時間の使い方は考えてやっていました。いかに時間をつくり、どう使うかが大事でした。

理事長　確かに、強い子、伸びる子を見ていると、弱音を吐きませんし言い訳もしません。状

況を否定的にとらえるのでなく、どうしたらその状況を改善できるかという見方をしますね。

小針　どう取り組むかという前向きな発想が大切ですね。

徹底した「信頼」の構築が抜群のチーム力を生む

理事長　選手たちの誰に聞いても、小針監督の練習風景はとにかく"熱い"と言われますが。

小針　そうですね。「作新は負けない、絶対に勝つんだ」ということをグラウンドで表現していくと、自然と熱くなっていきます。選手もそれを感じて、動く。毎日が監督と選手の勝負です。日頃から「負けない」という意識があれば試合でも「負けない」。そういう意識を持たせるのが日々の練習だと思うので、作新のグラウンドには自然とそういった雰囲気が生まれるのかもしれません。

理事長　一挙手一投足、野球に関わらないことでもかなり厳しく、細かく指導されますよね。

小針　アマチュア野球なので、生活態度の細かいところまで野球に出てしまうと思っています。ほんの少しのところで勝ったり負けたりしますからね。普段から、細かい部分の積み重ねを意識していこうと話しています。

理事長　日々の練習や寮生活では、選手たちのどういう所を見ているのでしょう。

小針　選手の中で誰が朝一番早く来て、最後に来るのは誰なのかとか、夜遅くまでバットを振っているのは誰か。またご飯を食べながらいっぱい食べているか、好き嫌いはあるのかなどをよく観察して野球指導につなげています。

理事長　これも野球に限らず教育の基本だと思いますが、子どもたち一人ひとりをよく見てあげること、そして「いつも見てるよ」ということを子どもたちに伝えることが大事ですね。

小針　監督が選手のことをわかっていると、選手に安心感が生まれるのではないかと思います。自分のことを理解してくれていると思えるわけです。そう思ってくれるとどんなに厳しいことを言っても、「これは自分のために言ってくれていることなんだな」と受け止めてくれます。そうした下準備をして、ダメなところはダメ、よいところはよいと言い、褒めたり叱ったりをなるべくわかりやすくメリハリをつけて伝えるようにしています。

理事長　子どもたちと真っ向勝負で向き合うことで、お互いを理解しあい、目標に向かってつき進めたということでしょうか。

小針　はい。5年前の2011年、初めてベスト4になったとき、「やっぱり決勝戦に行きたかった、決勝戦の雰囲気を味わってみたい」と心から思いましたので、それから毎年「決勝戦まで連れて行ってくれよ」と生徒たちに言ってきました。それを叶えてもらい、しかも優勝でき

たわけですから、本当に有り難いことでした。

理事長　高校野球で最も心を動かされるのは「チームの絆」だと思います。今回、負傷した藤沼選手が甲子園でベンチ入りして話題になりましたが、メンバーを選出するのはとても難しいことですよね。チーム全体の団結を監督はどのようにして作り上げているのでしょうか。

小針　それが自分の一番の役割だと思っています。夏の県大会には20名という枠があります。毎年3年生全員と話をします。特に20名に選ばれなかった選手とはじっくり話をしました。二人減らして18名にするときにも話をしました。選ばれたメンバー18人は全員の前で一言ずつ話をします。こうした全員で臨んでいこうという雰囲気をつくるための工夫は毎年やっています。

理事長　3年生全員と話す時は、一人ずつ呼び出して一対一で話しているのですか。

小針　そうです。後々につながることで、応援に熱が入るか入らないかに影響しますから。また、メンバーだけだと練習ができません。バッティングピッチャーなど色々な面でサポートしてくれる3年生はチームにとって心強い存在です。自分の役割をそれぞれが果たしてくれる。そこが作新の力だと思います。

理事長　たとえ自分が選ばれなくても「監督はちゃんと自分を見てくれていた。その結果としての決定なら、それはチームの勝利にとってはベストだったんだ」と納得できているのでしょうね。

小針　自分が出るよりあいつが出た方がチームの勝利につながりやすいと考える。全員で練習をしながらチームの勝利を優先することをわかってもらえれば、良いチームになっていくと思います。同時に、どこかで勝負をさせる機会も作ります。そこはチームにとっては大事なことですので。

理事長　すべての選手にアピールするチャンスを与えるということですね。考えてみれば"生きる"ということはすべて"闘い"ですからね。でもだからと言ってすべてを敵に回して反目していたら、この世はバラバラになってしまう。日々ライバルとして闘いながら、仲間として強い絆で結ばれ、同じ目標達成のため協調していく。野球とは、社会や人生の縮図ですね。

小針　それが野球の一番の魅力であり、深さだと思います。普段の練習や練習試合から、少ないチャンスかもしれませんが、それぞれが考え、互いに感じながらやっているようです。

理事長　甲子園の閉会式の際、勝った者の責任は本当に重いことを痛感しました。チームの中でも、メンバーに選ばれれば選出された者としての責任があり、選ばれなかった者に対する感謝や思いやりが何より大切ですね。

小針　野球選手の前にそういった人でなければなりませんし、そういう心がなくてはならないと思います。

社会に出てからを見据え「人間力」を育てる

理事長　監督としてちょうど10年目で優勝という一つの節目でした。これからどのようなチームを作ろうとお考えですか。

小針　新しいチャレンジをする、新しい目標に向かうという気持ちが強いのですが、そのためには、もう一度基本に戻ることから始めたいと思います。自分自身も含めもう一度原点に、基本に立ち返らないと新しい山には登れないという感じはします。

理事長　小針監督の野球はいつも基本に忠実ですから、どうしてもう一度原点に戻らなければならないのか、よくわかりませんが。

小　針　ここまでの10年間はずっといい意味で挑戦者としての勢いで戦ってきた感が強いので、もうちょっとしっかりしたチームづくりをしたいと考えています。野球の技術ももちろんそうですが、人間的な成長ができるように基本づくりをしていかないと、大学やその上のレベルの高いところに行ったときに通用しないという感じがします。そういう選手を数多く出していきたいということも一つにはあります。高校野球にとどまらず、という感じです。

理事長　野球に限らず、私たち作新の教職員全員が同じことを考えていると思います。卒業や大学合格がゴールではなく、作新で育った子どもたちが世の中に出た後、どれだけ有為な人材として活躍し豊かな人生を送ってくれるかということを、いつも一番に考えますから。やっぱり野球も変わらないのですね。

小　針　はい。選手としてしっかり戦える者は社会に出ても立派に活躍できる人物になれる。戦いながら成長していくのは社会人も同じだと思っています。私自身、先ほどもお話ししましたが、作新学院に育てていただきました。作新学院の教育によって今の自分があると思っています。作新でなければこうはなれなかったと。

理事長　そう言っていただけると、本当にうれしいです。

小　針　育てていただいた教えを軸に据えて、今度は自分が教育者として"作新魂"を選手たちに注入していきたい。それが恩返しになると考えています。

理事長　小針監督は野球を通して、主体性と協調性を備えた選手を育成してくれています。「主体性」と「協調性」、ともすると対立しがちなこの二つを兼ね備えることが「人間力」の基本であり、作新学院の教育の要でもあると思います。

小　針　さまざまな分野で活躍されているOBOGの皆さんのように社会に出たとき、「作新学院の卒業生は本気の度合いが違う」と言ってもらえるような生徒を育てていきたいです。まずは、新チーム全員で大優勝旗を甲子園に帰すことができるよう、さらに精進し、選手とともに成長していきたいと思います。

理事長　更なる高みを目指す姿を見守っています。今回の優勝は「作新学院」の優勝ではなく、地元の方々全員の、それも今ご健在の方ばかりでなく、学院の歴史をつながせて下さったすべての方々の"優勝"だったと実感しています。感謝をカタチにして、またいつか皆さんに恩返しできるよう、学院あげて日々新たに精進して行きたいと思います。